



Title	「マルティン・フィエロ」の邦訳と若干の問題点
Author(s)	吉田, 秀太郎
Citation	Estudios Hispánicos. 1972, 2, p. 50-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93567
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「マルティン・フィエロ」の邦訳と若干の問題点

吉 田 秀 太 郎

はじめに

「マルティン・フィエロ」が難解な物語りであることは、イスパニア語を母国語とする人々を対象とした出版物でありながら、なお数多くの注釈が殆んど各ページにわたってなされている事実を見ても明らかである。その難解さは、いわゆる古典的教養を必要とする類のものにも増して、この作品のもつ、ガウチョの生活にまつわるある特殊な状況から生じたものである。たとえば、第1部XIの333連に見られる次のような文章を読んで、直ちに理解できる人は少ないに違いない。

Con gato y con fandanguillo / Había empezado el changango, / Y para ver el fandango / Me colé haciéndome bola, / Mas metió el diablo la cola, / Y todo se volvió pango.

それもその筈で、ここには、彼らガウチョならではの風習や言語表現が幾つか盛りこまれているからである。このような事情から、これまで、数多くの注釈書が本国のアルゼンチンを中心として出されている。そのような状況の中にあって、わが国では、興村禎吉氏が、1962年に協同組合通信社（東京）から邦訳を世に出された。1部、2部を完訳されたのは、恐らく氏が最初の人であると思う。私は、そこで、「マルティン・フィエロ」の邦訳という難事業を成しとげられた氏の非常な努力と熱意に敬意を払うと同時に、原文と読み較べていく過程で気づいた若干の疑問点をとり上げて、検討し、明らかにして行きたいと思う。ただ、私のような浅学菲才が、先覚者の達意の文章を、些末な文法的詮索によって損う危険は大きく、それのみが気がかりである。なお、本稿のために使用したテキストは、Ramón Villasuso の注釈付きの José Hernández: *El gaucho Martín Fierro y la vuelta de Martín Fierro*, Ed. Sopena, Argentina. 1950 で、その他、数冊の文献を参考にしたが、その中、特に Francisco I. Castro: *Vocabulario y frases de MARTIN FIERRO*, Ed. Guillermo Kraft, Bs. As. 1957 に依るところが多かった。最後に、原文と邦訳との対照のために、原文の

各連にアラビア数字を付した。大ていは6行詩だが、4行詩もあり、あるいは第2部の「マルティン・フィエロの帰郷」に見られるように30行近くのものもある。それでは、ストーリーの展開の順に従って見てゆきたい。

- 17 Yo no tengo en el amor / Quien me venga con querellas ; / Como esas aves tan bellas / Que saltan de rama en rama, / Yo hago en el trébol mi cama, / Y me cubren las estrellas.

(枝から枝へ飛び交わる / きれいな鳥のするように / もつれをわしにもってくる / アモールなどは知らんのじゃ。 / わしはクロバーを寝床にし、 / 星をかぶって眠るのじゃ。)

ここでは、〔;〕で終る最初の2行を先ず訳すべきではなかったか。

- 21 Junta experiencia en la vida / Hasta pa dar y prestar / Quien la tiene que pasar / Entre sufrimiento y llanto, / Porque nada enseña tanto / Como el sufrir y el llorar.

(つむ経験の世のなかは、 / くれた、貸したのかんけいも / 苦労をしたり泣いたり / 人生、それがつとめなら / 苦や泪ほど身にしみる / よい教訓はありません。)

敢えて逐語訳をすれば、「苦しんだり、泣いたりしながらこの世を過ぎねばならない人は、やったり貸したりするほどまでに、この世の経験をつむものだ。」となり、ここで、下線の箇所が、一般的な表現ではなくて具体的にはガウチョの生活を指している点が強調されていると思う。原訳ではそれが見られないように思われるがどうか。

- 28 Y más malo que su *agüela*, / Se hacía astillas el bagual,

(おばあさんより、まだすごい、/……)

些細なことだが、ガウチョの言葉遣いの一貫性という点では、7音節にするための配慮も考えられないではないか、ちょっとていねいすぎはしないか。

- 36 El gaucho más infeliz / Tenía tropilla de un pelo. / No le faltaba un consuelo / Y andaba la gente lista. . .

(いちばんちゃんなガウチョでも / ひと色そろいの対の馬 / いくつもつれてゆうゆうと / 楽しみながら生きていた)

Un consuelo は Ramón Villasuso によれば un amor のことであり、また gente lista の lista は、diligente、つまり「働き者」の意である。

70 Nos mandaba el Coronel / A trabajar en sus chacras, / Y dejá-
mos las vacas / Que las llevaba el infiel. /

(自分の地領へコロネルは / みなを使いにするわけで / 牛はほっときば
りにされ / かまってくれる人もない。)

最後の詩行の el infiel はインディオのことだから、「かまってくれる人
もない」では弱いような気がする。「インディオが盗んでいってしまう」
くらいにすべきであろう。

79 Si no se llevaban más, / Es porque no habían hallado.

(だが、それだけのものだから / それですんだというわけさ。)

国境で、インディオたちに襲撃され掠奪されるガウチョの情景である。
この2行は、「彼らがそれ以上持ち去らなかったのは / 持ち去るべきもの
が見つからなかったからだ」という意味だから、表現にいま一つ工夫が必要
であろう。

82 Tiemblan las carnes al verlo / Volando al viento *la cerda*, /

(追風にのって飛んできて、 / 向かうところに道をあけ /)

cerda は、土人の剛い髪の毛のことだから、全体としては、「剛い髪の毛を、
風になびかせながら……」となるべきところである。

90 Habían estado escondidos / Aguaitando atrás de un cerro. . . / ¡Lo
viera a su amigo Fierro / Aflojar como un blandito! / Salieron como
maíz frito / En cuanto sonó un cencerro, /

(あちらをじっと、うかがって / 丘のうしろに、かくれてた / あんたの
知人、フィエロめも、 / 弱虫づらをしていたが / からん、と鈴の鳴る音
に / はぜ黍みたいに飛んで出た)

この訳文によると、マルティン・フィエロの側の者が主語であるようだが、
事實は、インディオたちが主語でなければならない。鈴を鳴らすのは、
F. Castro 氏によれば、インディオの攻撃の合図であるらしい。

91 Al punto nos dispusimos / Aunque ellos eran bastantes; / La forma

mos al instante / Nuestra gente, que era poca, / Y golpiándose la boca
/ Hicieron fila adelante.

(頃をはかって、乗って出た / 敵は大勢、さりながら / 小勢の味方、すぐさまに / 隊をそろえて、勇ましく / 無理に元気をはげまして / まえへ、まえへと進む列。)

原文の最後から2番目の詩行は、インディオのしぐさについて述べていると考えられるが？ また、原訳の「頃をはかって云々」は、敵の行為を表わしているかのようで誤解を招きやすい。

92 Se vinieron en tropel / Haciendo temblar la tierra. /

(ひしめき合って行く隊伍 / どやどや大地ふるわせる。)

Se vinieron はやはり「やって来た」の意に解すべきではないか。どうやら90, 91, 92, 93の連は、主客をとり違えて訳されているらしい。そこから、意味の不明瞭さが生じていると思われる。なお、同じく92の Pero tuve mi jabón, . . . の訳として「……ではないが、こんどは、ずるをした。」とあるが、jabón には susto, miedo の意もある。ここではむしろ、この意味に解すべきであろう。

94 ¡Qué fletes traiban los bárbaros! / ¡Como una luz de ligeros!

(ああ、うらやましい蕃族の / 駿馬の足のはやいこと)

¡Como una luz de ligeros! という比喩は、やはり生かしたいものだ。

95 En fin, para no echar panes, / Salimos por las lomas.

(いのちあつてのものだねと / 丘をまわって逃げました。)

Echar panes には jactarse, envanecerse, baladronear, decir bravatas などの意がある。

97 Y con la lanza en la mano, / Gritando: «Acabáu cristiano, / Metáu el lanza hasta el pluma.» /

(槍を手にした土人たち / 大声あげて叫びつつ / こちらめがけてやってきた。)

最後の2行は、余り意識しすぎた感がある。pluma は槍の柄の端を飾つてある羽根のことだから、工夫すれば、もっと具体的な訳が可能ではなかろうか。しかし、語数に制限があるため、困難な業ではある。

104 Después de salvar el cuero.

(皮がのこった身になって)

もち論、ここでは salvar la vida の意であるが、このような場合、日本語訳はなかなかむずかしい。「マルティン・フィエロ」にはこのような表現が多い。

109 Sólo una manta peluda / Era cuanto me quedaba: / La había agenciado a la taba / Y ella me tapaba el bulto; /

(ただ一枚の毛の掛布 / それが最後の残りもの / それをターバへ賭けに行きゃ / さっと、あっさりさらわれる)

agenciado は、ここでは conseguido, ganado の意であると考えられる。従って、「ターバで手に入れたものであって、それが私の体 (bulto) をおおっていた」の意に訳されるべきであろう。

115 Y hasta le hacía ver la luz / Al#que un cuero le llevaba. /

(皮などもってゆくやつへ / 瓶をちらちら見せつけた)

R. Villasuso は Hacía ver la luz の説明として Daba algún dinero と書いている。F. I. Castro も luz の訳として dinero と言っているところから、この点では間違いないだろう。銀貨の輝きから、「光」といったらしい。

120 Y al cabo de muchos días / En la misma pulpería / Dieron una güena cuenta, / Que la gente muy contenta / De tan pobre recibía.

(なんぼ待っても、お給金 / くれなかったのが、日がたって / この問題の居酒屋で / はっきり気がついたのは / そんな貧乏のどん底で / 貰うお金のありがたさ。)

3行目の güena cuenta は、119連の socorro と同じく、前払い金のことである。従って、「前払い金をもらった」の意となるべきではないか。

135 Era jugar a la suerte / Con una taba culera.

(かならず裏のでるターバ / そんな勝負はつまらない。)

訳文の最後の部分は補足的説明となっているが、この連全体のもつニュアンスからは、些か遠いよう思われる。

153 Y nunca se andan con chicas / Para alzar ponchos ajenos.

(ひとの仕事の手つだいにゃ / 決して、女子とゆきません。)

alzar は、ここでは robar の意ではないだろうか。

167 No aflojo al primer amago / Ni jamás fí gaucho lerdo:

(一つ二つの失敗じゃ / 弱りもしない、寝もしない)

隊長が酒を飲んで酔っぱらっているすきにマルティン・フィエロが逃亡し、郷里へ帰ってくる時の話であるが、この2行は、「私はほんの一寸した兆候にも敏感であり、決してとんまなガウチョではなかった。」の意に解釈すべきであろう。

168 Y lo mismo que el peludo / Enderecé pa mi cueva.

(やりなおそうとまっすぐに / 古巣へ足に向けたのさ。)

El peludo は、小さな、南米産のアルマジロのことで、ここでの比喩は、なかなか、面白いから、何とか訳文に生かしたいものである。

204 Y pelando el envenao / Me atropelló dando gritos.

(くってかかって来たようす。)

Pelar は desenvainar, sacar の意であり、envenao は cuchillo のことだから、ここでは、「短刀を抜いて、大声を出しながら私に襲いかかった」となるべきであろう。

211 Y en el medio de las aspás / Un planazo le asenté, /

(うんうん、うなり出したとこ / 横に払ったわしの剣)

第188連から第221連までは、国境を抜け出して帰ってきたマルティン・フィエロが、あるときお祭りのあるのを聞きつけ、そこへ行き、酔っ払ったあげくに、黒人と口論し、果は彼を殺してしまうまでのいきさつを述べたものであるが、las aspás は astas または cuernos と同義語である。人間に角などある筈ないが、角と角の間ということとは、額の部分を指していることになる。

218 Limpié el facón en los pastos,

(柱、柱で、剣を拭き)

Pastos と postes との勘違いではないか。Pastos は勿論、牧草のことで

ある。

222 A la llegada metió / El pingo hasta la ramada, /

(ガウチョがひょいと、やってきて / 乗馬のままで店の中 / どっとかまわず、乗りつけた。/

F. I. Castro は、ramada について、次のように説明している。

El techo, construido con ramas o paja, no tiene paredes. Se utiliza para reparo y sombra. Las ramadas se construyen en lugar próximo a las casas. Eran infaltables delante de las pulperías.

これによると、訳文と事実とは可成り違って来ざるを得ない。もっとも、限られた語数におさめねばならないという制約あることは認めるが。

225 Y me alargó un medio frasco / Diciendo: «Beba, cuñado»/

(お兄弟分、飲まねえか / と、半分空の酒の瓶)

問題は medio frasco である。Castro 氏によれば、ガウチョは、わざと、ある事象を縮小して表現する風習があるという。たとえば、medio guapo, medio ligerón, medio despierto といった具合にであるが、事実はもちろんその逆であるから、和訳に際して額面通りに受け容れるのは疑問である。ここでは「大きな酒の瓶」あるいは単に「酒の瓶」と訳すべきではないか。

236 Lo persiguen como a plaito, / Porque es un gaucho ladrón. /

(あいつらが追っかけてくるありさまで。)

ガウチョが追跡される様子を como a plaito と表現したのであるが、残念ながら、日本語にしにくかったためか、訳文には見られない。R. Villasuro 氏によると、それはまるで、「得意先のない弁護士が、訴訟事件を追いかけてまわすときのあの熱意に似ている」とある。これだけ長いと、さすがに字余りとならざるを得ない。

237 Tal vez como cimarrón / En una cueva lo tiran.

(野たれ死にした馬みたい / どこかの穴へ捨てられる)

Cimarrón は、ここでは野犬である。 *Vocabulario de Martín Fierro* によると、この野犬は、むかし沢山いたそうで、群をなして牛を襲うのみならず、馬にのっている人間にまで攻撃を加える有様だったという。

243 Pues nunca le falta un yerro / Al hombre más alvertido.

(どんなに、えらい人でも / きっと落度はあるものだ)

Alvertido は「周到な」、「注意深い」の意であって、「学問のある」とか、「立派な」などとはやや異っている。「どんなに用心深い人でも、きっとスキがあるものだから、〔一寸でも油断をすると野犬にやられてしまう〕」。

246 Pues ande el tigre se anida / También el hombre lo pasa, /

(虎の巢のあるところでは / 人もやっぱりとおるから)

この連の大意は、「虎が住めるのなら、人間も住める筈だ。家にいて官憲に取り囲まれるよりは、ここに住む方がましだ。」である。lo pasa は、やはり「過す」、「生活する」の意に解すべきであろう。

248 Y al campo me iba solito, / Más matrero que el venao, /

(それで、カンポのほう向いて / 子鹿のような逃げ足で)

原文の me iba solito と venao との関連性が、訳文では表わされていないように思う。訳では鹿の逃げ足の早さに重点がおかれているようだが、実は、この動物の孤独性が強調されなければならない。Pampa の venado は、大ていひとりぼっちで行動しているそうである。けだし、追われる身の gaucho の姿の象徴である。「マルティン・フィエロ」の理解の困難さは、正にこうした点にある。同様なことが、同じ連の次の詩行についても言えるであろう。

O en alguna vizcachera / Pasar la noche tirado.

(せめて野獣の穴にでも / 夜をぐっすり寝たかった)

Vizcachera は vizcacha という動物の穴である。この動物は、Castro 氏によると、自分の巢のまわりの牧草や屑などを、きれいに片づける習性があるという。だからこそ、pasar la noche tirado の tirado (手足を伸ばして) という言葉が生きてくるわけである。

249 Anda el gaucho como duende;

(とびとのように歩くのは)

Duende は「バケモノ」。

250 Sin más amparo que el cielo / Ni otro amigo que el facón.

(やっと見つけた空の下 /……)

原文は「空の他には自分を庇護してくれるものはない」といった意味の表現だと考えられるが。なお、ここには記載しなかったが、この *estrofa* 全体は、ガウチョ一般についての叙述であるように思われる。

254 Sin tener más compañía / Que su delito y las fieras. /

(友だちは / あの孤独さと野獣だけ)

Delito は、「罪」, 「犯罪」のことであろう。すでに、マルティン・フィエロは、黒人と、もう一人のガウチョを殺しているし、更に逃亡兵としての罪をも犯している。

256 Y que eran muchos jinetes / Conocí sin vacilar.

「たしか、多勢の乗り手だと / 知ってべつだん驚かず。」

ガウチョが独り草原をさまよっているとき、ちょっとした物音にもすぐ声を上げるチャハー鳥が鳴いた。そこで、みみずのように地面に伏して耳をすますと、馬の蹄の音が聞えてくる。そして、それが *muchos jinetes* であることが「はっきりと (*sin vacilar*)」わかった。

262 «No se han de morir de antojo», / Les dije, cuando llegaron.

(近くを動く気配して / こっちのほうから、声かけた。)

どのように声をかけたのか、不明である。

No se han de morir de antojo. は *No se van a quedar con las ganas*, つまり、「そんなにはり切る必要はない」という意味ではないだろうか。*morir de* ~ という形は、「~で死にそうだ,」「死ぬほど~だ」の意味でよく用いられている。

264 «Vos sos un gaucho matrero», / Dijo uno, haciéndose el güeno.

(捕っ手の中の、ある一人 / 親切めいた声で言う)

『てめえはお尋ね者のガウチョだろ』, と、大物気どりで (*haciéndose el güeno*) 一人が言ったわけである。大物気どりというのが果して最適な表現かどうかは疑問だが、いずれにしても、*haciéndose el güeno* が *dán-doselas de guapo* の意であることは間違いない。日本語訳は、やはりつけるべきであろう。

273 Uno que en una tacuara / Había atado una tijera, / Se vino como
si juera / Palenque de atar terneros, /

(それまで馬を一本の / 竹に繋いでいた野郎 / 子牛をつなぐ細杭の / ように、ひょろひょろやってきて)

Una tijera は、やはり、鋏である。羊毛などを刈るための鋏を2つに分解し、それを tacuara という竹にくくりつけて作った槍をもった男が、危険をもかえりみず攻めてきた様子であるから、「ひょろひょろ」という副詞は疑問である。

275 Pegué un brinco y entre todos / Sin miedo me entreveré; / Hecho
ovillo me quedé / Y ya me cargó una yunta, / Y por el suelo la punta/
De mi facón les jugué.

(ひと飛びとんで大勢の / 中へ、ずばりと割り込んだ / 右へ、左へ、まえ、うしろ / きりきり舞いの刃のさきが / 腰を払やあ、何のこと / どっと、地面へ、それきりさ。)

この連の3行目以下は些か原文の意味から逸脱しているように思う。先ず、Hecho ovillo だが、これは防御のための身構えを示している。そして、4、5行目は、敵を前にして、短刀の先で地面に線を引いたことを示しているが、これは、ガウチョの間では、相手を軽んじる仕業だそうである。これらのことが、訳文には全く生かされていない。

276 Se lo quité con el brazo;

(それをむんずと、もぎとった)

斧をもった男が自分に襲いかかる。それを腕 brazo で受け止めた。quitar には「奪う」の他に、攻撃などを「受け止める」の意がある。腕には勿論、ポンチョを巻きつけてある。

278 Dende ese momento yo / Me salí de mis casillas.

(その瞬間に、かっきりと / 覚悟をきめて、飛び出した。)

F. Castro 氏によれば、Salirse de las casillas は、「常軌を逸する」、「一切の分別をかなぐり捨てて」とある。従って、この場合、この2行の訳としては、「そのとき、私は、かっとなった」に近いものになる筈である。

294 Pero al chifle voy ganoso / Como panzón al maíz frito.

(しかし呼ばれりゃ、はぜ黍の / ように、チフレへ飛んで行く。)

訳文では、はぜ黍のように自分が飛んでゆくような印象を与えるが、原文の意味は、「ちょうど panzón, つまり腹の出っ張った男が好物の maíz frito にとびつくように、私は酒には目がない」である。作者の考えでは、panzón は概して大食漢ということになっているらしい。

301 Y todo gaucho es dotor / Si pa cantarle al amor / Tiene que templar las cuerdas.

(そして、ガウチョはみな大家 / 愛の唄でもうたうなら / うんと調子を加減しろ。)

訳文では、最後が命令形になっているが、ここは、愛のうたをうたうために、(ギターの) 絃の調子を加減する段になれば、ガウチョは誰でも、みな大家だ、というのが原文の意図するところであろう。

307 En mi rancho se pegó / Lo mismo que un sagaipé.

(ダニとそっくり、ねちねちと / うちにねばっていたもんだ。)

sagaipé はグワラニー語で、「蛭」を意味する。

312 Tenía el viejito una cara / De ternero mal lamido.

(老いぼれ野郎、しわくちゃの / 子牛のような面してた。)

母牛は子牛の毛を舐めて、きれいに揃えてやる。mal lamido は、「下手に舐められた」、ということは、きれいに毛が揃っていないことで、ひげもじゃの面をしていたという意味であろう。なお、第 328 連の 6 詩行は、印刷上の手違いか、訳文が脱落している。

337 Y a lo mejor los dejan / Tocando tablas.

(ところで、よいと、よいとこは / 絵紙にうつつ、それらしい。)

先ず、a lo mejor だが、「もしかしたら」、「多分」、「大方」の意であることは文脈からもうかがえる。そして tocando tablas は、「文なし」の意である。つまり、賭けごとで、有り金を全部巻き上げられた姿である。従ってこの 2 行は、「しかし、大てい彼らは身ぐるみはぎ取られる」の意味に解せらるべきである。

373 Al darle, malicio yo / Que en sus adentros pensó / Que el hombre los precisaba.

(みんなほんとに、いるものか / 神を疑うこともある。)

malicio の訳として「(神を)疑う」とあるが、果していかがなものであろう。malicio には sospecho, pienso, me imagino の同義語がある。イスパノ・アメリカでは、この動詞が、よく用いられているように思う。

387 En fin, amigo, yo salgo / De estas peregrinaciones.

(だから、いよいよ、この旅行 / わしは決心したわけだ)

「マルティン・フィエロ」の最後の連は、395である。いよいよ、第1部も終り近くなった。ところで、この peregrinaciones だが、「旅行」というよりも、malandanzas, つまり「不幸なできごと」、「不運な生活」のことではないか。しかも salir de estas peregrinaciones だから、「この不幸な生活から抜け出す決意です」となるように思える。

467 Cuando es manso el ternero / En cualquier vaca se priende ;/ El que es gaucha esto lo entiende, / Y ha de entender si le digo / Que andábamos con mi amigo / Como pan que no se vende.

(すなおな牛はおとなしい / どの親にでもついて行く / ことをガウチョは知っている / どんな意味だか、わかるはず / 金で買えない友情の / 二人並んでゆく姿。)

非常に語呂もよく、リズムカルな訳文だが、やはり、立ち止まって考えざるを得ない。

原文の最初の2行は、R. Villasuso 氏によれば、«Becerrita mansa todas las vacas mama.»というイスパニアの諺の adaptación である。実際、すなおな子牛が、本当の母牛以外の牝牛の乳を飲むことはなかなかできないらしい。牝牛は自分の子牛か否かを見定めて、自分のものでなければ飲まさないのが普通だそう。しかし、中には、ずるい子牛がいて、そっと後の方から乳房にありつくものもいるという。もしそうであれば、原文の manso は、どう見ても「おとなしい」とは考えられない。反対のことをわざと言っているのではないかと考えられる。因みに、F. Castro 氏はこの文の説明として、次のような諺を掲げている。Cuando hay hambre no hay pan duro y a cualquier puerta se llama.

次に、Como pan que no se vende だが、やはりここは「売れないパンのように」とすべきではないか。あるいは、意識して、「あちこちを放浪しながら」としてもよいであろう。

476 Primero entierran las prendas / En cuevas como peludos ;

(まず、穴を掘り、その中へ / 財産全部埋め込んで)

Peludos のように。Peludo は「よろいねずみ」。

487 No hay plegaria que lo ablande / Ni dolor que lo conmueva.

(祈るころもやわらげず / 苦痛もさしてひびかない。)

plegaria には「お祈り」の他に「懇願」の意もある。ここでは、後者の意に用いられているのではないだろうか。「どんなに彼ら（インディオたち）に懇願しても、軟化したりはしないのだ」。

573 No lo había visto jamás :

(実際、見たのじゃないんだが)

土人たちが子供を育てる方法について語る件で、それが非常に野蛮で、子供を板にしばりつけておくものだから、後頭部がぺしゃんこになっている、というわけである。そうすれば、ここでは、「そんな野蛮な育児法は、それまで見たこともなかった」の意ではないだろうか。

586 Pegó un brinco como gato / Y me ganó la distancia,

(やつは、すばやく、猫のよう / ひょいと、一とび、飛んで来て)

これでは me ganó la distancia の意味が十分に表されていないのではないか。このあとの文章に出てくる boliadoras, つまり、綱の先端に小さな球のついた投げ綱、を操るためには、ある程度の距離が必要なので、そのためにうしろに跳んだ、というのである。訳文では、むしろ接近する印象を与えている。

670 «A la Justicia ordinaria / Voy a mandar a los tres.» / Tenía razón aquel Juez, / Y cuantos así amenacen ; / Ordinaria. . . es como la hacen : / Lo he conocido después.

(「普通裁判、送局は / 三人という判決」と。 / なるほど、フェスのいうとおり / うまいおどしもあるものだ。 / その、普通とは、どんなのか、

あとで、はっきり知りました。)

3行目以下は、原文のニュアンスが、必ずしも十分に伝えられていないらみがある。Y cuantos así amenacen は、「そのようなおどしをかける人々すべて」であり、彼らも tienen razón だ、というわけである。ここで問題は、Ordinario という単語のもつ peyorativo な意味を、いかに表現するかということである。「Justicia Ordinaria とはよく言ったものだ、その Justicia を体験して、正に Ordinaria であることがわかった」というのが本文の趣旨であろう。

720 Y obligados a sufrir / Una máquina de daños.

(いやおうなしに身につけた / 危害を作り出す機械)

マルティン・フィエロの次男が身の上ばなしをする件だが、ここで、una máquina には multitud, gran cantidad の意味もある。

765 El zorro que ya es corrido / Dende lejos la olfatea.

(一度追われたことのある / 狐は、はるばる嗅いでくる)

ビスカチャ老人の処生訓であるが、olfatear (嗅ぎつける) は、ここでは2通りの解釈が成り立つであろう。訳文のような考えが一つで、もう一つは、嗅ぎつけて、特に危険なことを嗅ぎつけて、未然に、それから遠ざかるというものである。1行目の corrido という語には、ひどい目に会う、の意もあるから、私は、後者を択びたい。

766 Ansina, vos, ni por broma / Querrás llamar la atención:

(こっそりしてりゃ、うそにでも / 人目ひかんですむものだ。)

その前に、El que gana su comida / Güeno es que en silencio coma; というのがあるから、ことは、「そんなわけだから、お前、冗談にも、人の目につくようなことをしてはならんぞ」とする方が、原文の意味に近いのではないか。

771 Es un bicho la mujer / Que yo aquí no lo destapo,

(ここで這わせる気はないが / 女はビーチョの一種類)

Destapar は descubrir の意であるから、「私がはじめて言う言葉ではないが / 女というものは虫けらだよ」

786 El maldecía al Padre Eterno / Como a los Santos benditos, /

(天の父なる聖者をも / ののしり通す爺さんは)

Vizcacha 老人の末期を描いた場面だが、ここに現れる Padre Eterno と Santos benditos とは厳密に言えば別なものであるから、邦訳の場合にも区別する方が好ましいように思われる。

833 De tantas alternativas / Esta es la parte peluda:

(浮き沈みある人生の / これは、つまらん場面だが、)

第2部第16章の「悲恋の薬」の一節からとり出したものである。原文の peluda の訳としては「つまらん」よりも、むしろ「困難な」、「厄介な」の方がよいのではなかろうか。peludo には様々な意味があり、且つ、「マルティン・フィエロ」にはたびたび現れる単語である。「困難な」の意味で用いられているものとして、たとえば、第719連の次のような文がある。

Y aunque la cosa es peluda / Haré la resolución—.

834 Lloro el hombre ingratitude / Sin tener un fundamento: / Acusa sin miramiento / A la que el mal le ocasiona, / Y tal vez en su persona Ningún merecimiento.

(たいしたことでないくせに / 不人情だといって泣き / 何かさわりになるひとは / 考えもなく憎むのだ。 / そしておそらくそのひとは / それほど悪いひとじゃない。)

同じく「悲恋の薬」の一部である。この連は、恋する男性の有する共通の特徴を述べたものであると考えられないだろうか。原文の el hombre, la que, su persoua の代表するものの意味が、訳文によると、余り明瞭ではない。Sin tener un fundamento を「たいしたことでない」と訳すことにも些か問題があるように思う。最後の2行は、「そのように、自分にすげなくする女性をうらんではみるものの、さて自分にはその女性の心を得るに値するほどのものがあるか、といえは、何もないのだが」という意味に解釈すべきであろう。

882 Y arreglé una trapisonda / Con el dueño de una fonda / Que entraba en la peladera.

(あたかも禿げてくるとしの / 宿の親爺とぐるになり)

恐らく、peladera と pelo との形態上の類似が、「禿げてくる」を連想

せしめたのであろう。しかし、F. I. Castro 氏によると、Peladera は Lugar donde se juega con fullerías. である。つまり、いかさまによって、相手を身ぐるみはぎ取る (pelar) するところ、であり、そこに出入りする爺いとぐるになったわけである。

889 Acomódese al contrario / En todo juego cartiao :/ Tener ojo ejercitao / Es siempre muy necesario.

(金を賭けない勝負には / その反対でかまわない / 目をじゅうぶんに慣らすのは / どんなときでも、大事です。)

まず、Acomódese al contrario は「相手に合わせてゆけ」という命令文であらう。次に、Juego cartiao とは、naipe や carta による遊戯、(賭け) の総称であることが明らかである以上、「金を賭けない勝負」という訳には疑問を抱かざるを得ない。

898 Si me llamaban al dado, / Nunca me solía faltar / Un cargado que largar, / Un cruzao para el más vivo, /Y hasta atracarles un chivo / Sin dejarlos maliciar.

(さいころ振りにさそわれて / まずことわったことはない。 / てんてんころがる派手なのや / ぞっくりそろろう、さいの目へ / ちょっとわきから何しても / 怪しむだけのすきもない。)

Nunca me solía faltar の主語は「私」ではなくて、その次に来る un cargado, un cruzado, atracarles un chivo ではないか。なお、cargado は、特定の目が出るよう細工されたさいころ。cruzado は、相対する面に同じ目が刻まれている、いかさま用のさいころ。Atracar un chivo は chivo, つまり「ごまかし」を行なうこと。(いずれも F. I. Castro 氏による。) 邦訳は原文の大意を伝えているとは言え、この様に、細部については、幾つか考慮すべき余地を残している。

921 Tirado como el San Ramón / Después que se pasa el trance.

(死線を越えたサン・ラモン / みたいに、でんと寝ころんで。)

種々考えた末の訳文に違いない。San Ramón は安産のための守り聖人であり、妊産婦はこの守護聖人の像を大切にしているが、一度お産が終ると、あとは不必要とばかりに放置してしまうが常であるという。そうすれ

ば、San Ramón にまつわるそうした風習を知らない限り、いかに文言に細工を加えても、理解することはできない。その点では、この邦訳も、ある程度止むを得ないであろう。ただ、一見、サン・ラモンが死線を越えたかの印象を与えるのはうなずき難い。

929 Atravesao me agarró / Y se aprovechó aquel ñato;

(横あいからの、ニャットめに / まんまと、とらえられたので)

Atravesao は、en desventaja, sin poder defenderme, または imposibilitado の意味に用いられている。従って、「横合いから」には疑問がある。

948 Dentran después a empeñarse / Con este o aquel vecino ; / Y como en el masculino, / El que menos corre, vuela, / Deben andar con cautela / Las pobres, me lo imagino.

(次は、あれこれ、住民を / いじめにかかるとのであるが / 男の中で、ろくすっぽ / 走れんやつが飛ぶやつで / よほど女に気をつけて / いねばならんとおもわれる。)

原文の3行目以下は、「男は、一番走れない奴でも、飛ぶことができるものなのだから、(即ち、男性の本能は覆い難いものなのだから)、かわいそうに、女たちは、よほど気をつけていなければ……) の意であろう。訳文の「女に」は「女は」のミスプリントであろう。

949 Muchas al juez acudieron, / Por salvar de la jugada;

(フエスのとこへ女たち / せめては籤を何とか、と……)

La jugada であるが, mala situación, Acción perjudicial ejecutada contra una persona のことであるとする意見が支配的である。

970 Confórmese con la tumba ; / Y si no. . . no se conforme.

(〔死ぬまでつづく貧乏は〕 / お墓でがまんすりゃよいが / できなきゃ、がまんするじゃない。)

邦訳は死と墓とを巧みに組み合わせているが、tumba は「墓」の他に、すじ肉を塩なしで煮た料理の名前でもある。不味く毎日出されるために兵士はへきえきしているものである。

1006 Tenía los ojos paraos / Como los ojos de un santo.

(聖者の誰かに似通った / つった目をしておりました。)

Ojos paraos は、ここでは、「やさしい眼差し」(de mirada bondadosa)の方が santo にふさわしいようだ。

1123 . . . es muy larga y muy triste / La noche de la redota.

(おもえば悲し、わたくしの / 待機の夜は長かった。)

Redota は derrota が metátesis 現象によって変ったものである。同じような場合が、第1120連にも見られる。

No avergüence mi redota,

1132 Y aquí, pues, señores míos, /Diré, como en despedida,

(それで、これから言う文句 / 別れ言葉のようですが)

ここは、「ここで、みなさん、お別れに、一言いっておきますが」くらいの意味に解釈する方が妥当であろう。

1138 La mulita pare nones / Todos de la misma clase.

(ムリータは奇数の子を産むと / みんなおんなじ子になると)

Misma clase は性別のことを言っているのではないか？

1191 Pues son mis dichas desdichas / Las de todos mis hermanos ;

(わが同胞の幸、不幸、 / すなわち、わしの幸、不幸)

Dichas desdichas の dichas は名詞であるよりも、動詞の過去分詞形であると考えられないだろうか。「私がこれまで述べてきた不幸は……」というのが、語順であると思う。なぜなら、この物語は、一連の不幸(勿論ガウチョの)物語りに他ならないからである。

おわりに

以上、私は「マルティン・フィエロ」の第1部及び第2部を通じて、邦訳上の問題点をさぐってきた。元来、翻訳とは裏切りのことだとさえ言われているくらいに、困難な仕事である。また、訳者の原文解釈の仕方によって、なかり異った形になることも少なくない。この点を十分に考慮して、検討を加えてきたつもりであるが、必らずしも常に当を得ているとは言い切れない。本稿を書き終ってみて、原訳者の苦心のほどが、しみじみと感じられる。そして、ややもすると、あら探しになり易いこの種の作業では

あるが、これもこの作品のよりよき理解のためには是非必要なことだと考える。なお、原文と訳との照合の際、極めて示唆に富む幾つかの訳例に出くわした。この際、邦訳問題の一環として、見逃すわけにはゆかないので、ここに掲げておきたい。

144 Cuando me vido acercar: / «¿*Quién vivore*. . . ?» preguntó; / «¿*Quién vivoras?*», dije yo. / «¡Ha garto!», me pegó el grito, / Y yo dije despacito; / «¡Más lagarto serás vos!».

(わしの来たのに気がつく / 「だりかッ」, とすぐに誰何した / 「ダニじゃねえぞ」といってやる / 「とんまりッ」やつの呼び声 / 「とんまはきさまのことだろう」 / わしは、ゆっくり、いい返す)

国境の守備隊に送られたマルティン・フィエロが、歩哨に立っていたナポリ生まれの兵に誰何される件である。いわば、完全な意識であるが、原文のもつニュアンスを巧みに伝えている。その他、いわゆる *juego de palabra* の用いられている個所が少なくない。たとえば、第 195 連とその次の連についてみると、

195 «Va. . . ca. . . yendo gente al baile.»

(夜の……ふけたのが……よって来た) というマルティン・フィエロの悪口に対して、

196 «Más vaca será su madre»

(よって来たのは、そちらさま) と答えた黒人女の返事などがそうである。Va. . . ca. . . yendo は、Vaca, yendo ともなり、Va cayendo とも解釈できる。最初の vaca は、「牝牛」の他に、女性を軽蔑した感情を含んでいる。

これらは、ほんの一例にすぎない。もともと本稿は「マルティン・フィエロ」に関する「若干の考察」と題して書く予定の原稿の附録として掲げるつもりであったのが、都合で、先になってしまったものであり、その他の事項に関しては、機会を改めて述べるつもりである。